

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	4372800914		
法人名	医療法人荒瀬会		
事業所名	グループホーム「年輪」		
所在地	熊本県上益城郡甲佐町緑町359-9		
自己評価作成日	9/13	評価結果市町村受理日	令和7年1月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和6年10月25日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

家庭的な雰囲気の下、ご利用者一人一人の個性を尊重し、年齢を重ねられる中無理のない範囲で自立支援を促し、少しでも認知症の進行がゆるやかになる様運動や脳活性化訓練や声掛け等に気を配り、ケアの統一を図っている。  
母体病院が近いことも有り、急変時には病院との連携がスムーズに行え、重度化防止にもつながっている。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

古くから立ち並ぶ商店沿いに開設したホームは、当初より地域資源を活用しながら運営している。時代の流れとともに閉店された所も多いが、入居者にとっては並行して流れる水路とともに馴染みの場所でもある。コロナ禍によって長い間外出を制限していたが、本年度は紫陽花や桜、つつじなどの季節の花見学に出かけたり、大型商店での外食の機会にはそれぞれが好きなものを注文されるなど入居者にとって何よりの一日となっている。運営推進会議での情報をホーム運営に反映させ、身体拘束適正化委員会を通じて身体拘束や虐待についてホームの現状を明らかにしている。また会議後に避難訓練を実施するなど推進会議が機能しており、家族や地域、行政とを結ぶパイプ役として継続されている。今後居室への入室や制限のない面会が再開されることが期待される。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念に基づき職員一同実践しているが、人材不足の為十分な対応が出来ない日もあり、穏やかに過ごせない時もある。	開設時からの理念を数年前に見直し、改めて地域密着型事業所として「入居者が生まれ育った地域の中で自分らしく過ごせるよう支援する」といった内容としている。ホームは旧商店街の一角にある母体医療機関に隣接し、自然豊かな昔ながらの佇まいの中にあり、入居者が日々をゆっくり過ごされている。理念を振り返る機会は無かったようであるが、職員の中には浸透している。	今後は理念をかみ砕き個々の入居者にとっての自分らしさや笑顔を引き出すための支援がどうかなど、節目節目に評価して振り返る機会をもつ事も検討いただきたい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	運営推進会議の際に区長さんや民生委員の方と情報交換したり、2ヶ月に1回は近所の理容店より散髪に来ていただき交流を行っているが、コロナの影響もありその他の交流はなくなっている。	ホームの前面道路の整備により、これまで地域の人々と協働で行っていた道路への花植え作業は現在行われていないが、入居者は散歩の際人々と挨拶を交わすようにしている。回覧板や町の広報誌で地域情報を収集し、広報誌を楽しみに見られる方もおられるようである。食材購入や理髪店は地元の商店を利用し、地域と関わりながら生活している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	区長さんや民生委員の方、利用者のご家族にはお伝えしているが、地域の方々には中々伝える機会が無い。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進の際、助言を頂いたことに関して真摯に受け止め、解らない点は意見を求め、サービスの向上に活かし、他のスタッフやご家族にも報告している。	会議は建物内にある旧デイルームで開催している。行政からは法改正についての説明や地域代表として区長や民生委員から行事の情報、感染症の状況、地域の防災訓練の実施要項について告知などが行われている。家族からも夏の猛暑を心配されるなどそれぞれの立場で発言されており、ホームからも管理者と記録者の2名が同席し、報告書は全家族に送付している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進の際に取り組みを伝えたり、解らないところは直接電話する等し、協力頂いている。	運営推進会議には行政や包括の職員が参加しており、必要な情報の提供、共有が行われている。ホームから虐待や感染症などの委員会の立ち上げ及び実施内容などについて質問を投げかけ、指導をもとにケア会議の中で母体の看護師を講師として研修会を開いている。認定調査時には管理者が対応して入居者の現状を正確に伝えるようにしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ケア会議の際に身体拘束に関する勉強会を年に2回実施して不適切なケアがないか検討している。本人に危険が伴う場合は、ご家族に許可を得て計画書に上げたうえで、四点柵や一時的な玄関の施錠を行う時がある。	運営推進会議に身体拘束適正化委員会を設置して、ホームの現状を報告し、運営の透明性を図るとともに参加者からの意見や提案を得ている。転倒防止にベッドから布団に変更したもの、入居者の状況をみて再度ベッドに変更し、やむをえず4点柵を使用した際には家族の了承を得てプランに入れ、運営推進会議でも報告している。勉強会ではスピーチロックについて自身を振り返り、共通の認識をもって支援にあたることとしている。	外出傾向の方の離設対策に玄関の施錠を行った際には家族や推進会議で報告し、必要がなくなった時点で解除を行っている。今後も必要の有無や入居者へもたらす影響などについて経過を記録として残し家族と共有することが求められる。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年に2回、身体拘束と併せてケア会議の際に勉強会も行って意識付けしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ケア会議の際に勉強しているが、成年後見制度や日常生活自立支援事業は、普段あまり接する機会無く勉強不足である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	出来るだけ短く、解りやすく説明し同意を得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進の際に家族代表の方の話を聞いたり、月に一度支払いの際に家族の要望を聞いているが、運営に反映させるほどの内容は出ていない。	運営推進会議に参加する家族や面会時などに意見や要望を引き出すようにしている。ホームでは利用料の支払いを直接持参される方もおられ、要望を尋ねるとともに面会を促すようにしている。入居者の要望は普通の会話の中で聞き取り支援に反映するようにしている。	入居者からは、自宅への帰省も要望の一つとしてあがっているようである。今後感染症などの状況をみて、家族の協力が得られたらと考える。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のケア会議にて意見・要望を述べてもらい、ケアの統一や運営に反映させており、ストレスケアについても検討している。	月の会議はカンファレンスを兼ねており、ケア向上につながる意見を職員が自由に提案している。また業務改善についても普段から発言されており、職員同士が言いやすい環境作りに努めている。職員が定期的にストレスチェックを受けることで、入居者への支援を振り返る機会としている。	現在の職員体制にあと少しゆとりがあればとしている。人員不足はどの業界にも通じることであるが、今後体制が整えばと期待したい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課の際にスタッフそれぞれの個性や良さを尊重した評価を行っている。やりがいや向上心が持てるよう努力はしているが、人材不足から難しいところである。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	勤務表と照らし合わせながら研修に参加できる機会を設けているが、全員の参加は難しい。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内のGH乙女との情報交換や外部研修や上益城ブロック会などを通じて同業者と交流したり、勉強会に反映させたり、少しでもサービスの質が向上するような努力を行っている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	認知症状が進んでいる方の思いを把握することは難しいが、馴染みやすい言葉掛けを行い、より良い関係を気づき、会話の中で要望を聞いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約や支払いの際に、ご家族に利用者様の様子や困り事・重度化した時の希望を伺い、信頼関係が築けるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	管理者、ケアマネ、家族、可能であれば本人等で話し合い、もしリハビリなどが必要であれば、母体病院と連携しながら対応するようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	料理の下ごしらえや洗濯たたみ、茶碗拭きなど利用者様の出来る範囲で役割を持って生活して頂いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	他科受診の際や衣替えや必要時に足りない物品があれば連絡し、対応して頂くなど利用者様と家族の絆が途切れないように支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナの影響もあり居室でゆっくりとした面会はまだまだ出来ないが、ご家族や友人の面会時玄関先などで対面で行って頂いたり、ご家族などの写真を居室内に飾る等して思い出や歴史を大切にしている。	入居者との面会は玄関内やデイルームで行い、家族がホーム内に入る事は出来ていないが、利用料持参の折には顔を見ていかれるように声掛けを行っている。ホームは当初より手作り食を提供しており、畑に植えた季節の食材を見ながら話しが弾み、ふきの皮むきなどの下ごしらえや、馴染みの作業に関わる事で自信につなげ、人だけではなく関わりのある物との関係性を継続している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者1人1人を観察し、穏やかに過ごせるような座席を考え、1人1人の個性を大事にしてお互いを尊重し合えるよう声かけを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所されたご家族とは連絡が無い限り中々接する機会はなくなっている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	認知症状が進んでいる方もおられる為、入所者全ての方の意向をくみ取る事は難しいが、本人を見守り会話する事で、出来る限り本人の意向に添えるよう努力している。	入居者の意向は朝のひと時や昼食後のゆっくりした時に引き出すようにしている。自ら話される方もおられるが、難しい場合にはこれまでのホームでの暮らしぶりや、他者や職員との関わりからくみ取り、支援に反映するようになっている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の担当ケアマネージャーやご家族からこれまでの暮らし方や経緯を聴き、本人様の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入所者1人1人に対応しながら、その日その日の心身状態やADLやQOLの把握に努めている。特変があれば病院受診を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月1回のケア会議や家族の面会があった時などに意見を交換し、ケアの仕方を決定し、介護計画に反映している。	職員を入居者の担当制としており、個々の衣替えや室内環境に関わる他、プランについては毎月評価に携わっている。ケア会議には全員が参加し、入居者の現状を共有して気づきを提案している。入居者の思いは普段の関わりから聞き取るが、家族とはコロナ禍時には電話や面会時に意見を収集している。ケアマネージャーは入居者・家族・職員・時には母体医師や看護師の意向や助言をもとにプランを立案している。	コロナ禍においては担当者会議の開催が難しく、電話などで家族や関係者の意向を確認していたが、今後は状況をみながら直接開催が出来ればと考える。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子は日誌やそれぞれの介護記録に記入し、また担当職員による「ひと月の様子」やモニタリングを作成し、気付いた点は皆で共有して、介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	他科受診の際に本人様の様子説明は勿論、家族の都合により急遽同行したり、急変時の救急搬送時の同行などその時の事情により対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ以前は近所のスーパーへの買い物や文化祭・夏祭りも近くで見物したり、老人会にも参加していたが、現在はあまり出来ていない。5類になって1度だけ苑外活動で外食をしたり、2ヶ月に1回地域の訪問理容店を利用している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけは母体病院であるが、精神科や歯科・眼科等他科受診の際は、家族との受診をお願いしているが、必要時はスタッフが同行する事もある。	これまで隣接する母体医療機関にかかられていた方もおられ、家族の同意のもと全員が月1回や2ヶ月に1回の診療を受けている。結果や日頃の状況は毎月の報告書の中に記す他、電話や面会時に伝えており家族の相談や質問を受けている。他科受診は家族の対応をお願いしているが、必要に応じて職員も同行している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	母体病院の看護師と医療連携しており、定期的なバイタル測定時や日々の生活でいつもと違う気づきがあれば、相談し受診支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者の入院の際には、苑での様子を介護サマリーに記録し病院に伝えている。また、退院の際にも出来るだけ早めに様子を確認するようにし、早期退院にも協力している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約の際にご家族に頼みを確認し、スタッフみんなで共有し、母体病院や訪問看護と連携しながら支援を行っている。	入居時に看取りに関する指針をもとに説明し、意向確認と同意書を受けている。また、身体状況に変化が見られた場合はその都度確認している。最期は医療機関を望まれる家族もおられる。看取りに関する研修会も行われ、この1年でお一人の最終を支援した際は、本人、家族の思いを汲み取りコロナ感染症に十分配慮し居室で過ごす時間ももたれている。	看取り支援後にはあらためて振り返りの機会を持つことも必要と思われる。今後の取り組みに期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防訓練の際に心マッサージやAEDなど蘇生法の訓練を行ったり、急変時にバイタル測定を行い、速やかに母体病院に連絡を取って指示を仰いでいる。全ての職員までは徹底出来ていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回の火災による避難訓練と防災訓練を行っており、区長さんや地域消防団の方とも協力体制が出来るように努力している。	今年度は5月に消防署の参加協力を得、水消火器を使用した訓練を行っている。区長や消防団など地域との協力体制についても引き続き強化に努めたいとしている。BCPIについては作成後に職員との共有の機会をもっており、備蓄はホーム内で主に米を確保している。台風接近時はホーム周辺の確認や窓ガラスへ養生テープの張り付け、当直職員の配置などが行われている。	今後もホーム周辺の可燃物やコンセントの埃、落下物がないかなど日頃から安全確認に努めていかれることを期待したい。



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	家族的な雰囲気ですぐに解りやすい言葉掛けを行い、トイレや入浴・オムツ交換時にはプライバシーを保護し、1人1人の人格を尊重するよな対応を心掛けている。	呼称は苗字や安心される下の名前など個々に応じて対応している。入居者にわかりやすいよう時には方言も使いながらコミュニケーションを図っている。職員の守秘義務の徹底や個人情報の使用については家族の承諾を得ており、居室へ入る際は在室の有無にかかわらずノックや了承を得るようにしている。起床時や入浴後は整容に努め、髪のカットは主に2ヶ月に1度の訪問カットを利用している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	認知症状が進まれている方は意思がはっきりしない事もあるが、入浴後の着る服やおやつ選択など些細なことで有るが決めて頂いたり、表情や行動で読み取り対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の流れや1ヶ月の予定表を基にレクレーションや入浴・食事・トイレ誘導などを行っているが、その日の体調や気分を観察しながら希望に添えるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時や入浴後整容して頂き、出来ないところは介助している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	1人1人に合った食形態で提供しており、後片付けや茶碗拭き、時には簡単な下ごしらえなどを数名の方に手伝って頂いている。	法人の栄養士が作成した献立にそって職員による調理が行われている。食材は地域や隣町などのスーパーまで足を延ばし、職員が吟味して購入している。魚は業者より骨ぬきされたものが配達されている。行事食の提供や誕生日には入居者が喜ばれるちらし寿司やケーキなどを準備し祝っている。入居者はおぼん拭き、蕎麦の皮むきなど食材の下ごしらえに取り組まれるようである。コロナ禍以降検査者は設けておらず、落ち着いたら再開したいとしている。	食事中のエプロンについては今後も首に負担のない付け方など配慮されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事やおやつと共によりしっかり水分補給して頂くよう声掛けしている。また食事については、管理栄養士の献立を基に準備・提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後洗面所で出来る方は案内し、その他は自席にて歯ブラシ等準備するとされているが、磨き残しがある際はスタッフが仕上げ磨きを行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者様の訴え時や定期的にトイレ誘導することで汚染無く排泄して頂き、出来る限り自身で行って頂いている。	日中はトイレでの排泄を基本に支援しており、3か所のトイレで居室の近くなど使い慣れた場所を使用されている。現在、全員がリハビリパンツで過ごされ、夜間のみポータブルトイレを使用される方が2名おられる。また、安眠を重視して夜間のパットを使い分けるなど状況に応じた取り組みが聞かれた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食物繊維が多い食べ物や乳製品や水分摂取を促し便秘予防を行っているが、それでも難しい時は、下剤にて排便コントロールを行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	1日3名を目安に順番に入浴して頂いているが、体調不良や便汚染等でやむを得ず順番が代わることもある。	個々の体調を確認し、週2~3回午前、午後で入浴支援を行っている。浴室は冷えることから冬場は特に温めて入ってもらっている。身体状況からシャワー浴が中心の方もおられ、かけ湯など工夫しながら支援している。菖蒲や柚子を使った季節湯は毎年取り組んでおり、全員が入れるよう3日間準備している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中レクリエーションへの参加を促し、活動されることで傾眠予防に努め、また休まれる前には必ずトイレ誘導し、安眠を促している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬後や日々の様子を観察し、体調変化が見られる時は母体病院やNSIに連絡し症状の変化、薬による副作用や目的の把握に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食器拭きや洗濯物たたみ、新聞たたみ、ダスキン掛けなど一人一人が出来る範囲役割の一つとして取り組んで頂いている。また、気分転換にドライブ、苑庭での日向ぼっこ等出来る範囲支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	帰宅欲が強い方や不穏な方がおられる日は苑の近所や裏庭へ散歩に出掛けたりしている。また年に数回苑外活動で普段行けない様な場所へドライブに出掛けたりしている。まだまだコロナが落ち着かない為、家族や地域の人々との協力体制はほとんど出来ていない。	車で外出はトイレの場所や車酔いしやすい方に十分配慮して行先を検討している。地域資源を活用し車窓からの桜見物や足を延ばして紫陽花見学に出た際は、商業施設内のレストランでの外食も楽しむことが出来ている。管理者は以前、地元神社への参拝に出かけたこともあり、今後機会があれば取り組みたいとしている。	今後全員での外出が難しくなれば個々の希望に応じ個別支援での外出や、家族に現地を集ってもらい一緒に外出を楽しむ等新たな取組に期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的にお金は家族の方が管理し、一部苑でも預かっているが、買い物に行く機会が無くなっている為、自ら支払われる事は無くなっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	御家族等から電話があった際は本人に繋いで話して頂いている。聞き取りにくい場合はスタッフが対応し会話しやすくなる様に支援している。また、手紙はほとんど無いが、来たときにはスタッフが代読している。本人様が手紙を書かれる事は無い		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関、廊下やホール壁面等には季節に合った飾りをする等工夫している。共有空間はなるべく明るくし、TV前にソファを置いてゆっくり出来るスペースを作っている。居室で休まれる際は明るすぎない様遮光カーテン、障子を使用している。	席の配置は入居者同士の相性などを考慮して決定している。廊下やリビングには飾りや掲示物により季節を感じられるようにしている。また、ユーチューブを活用し体を動かしたり各地の季節の光景を楽しんでもらっている。ホーム内は居室からリビングまで一直線であり、移動は歩行訓練の機会にもなっている。	経年と共に掲示物や飾り物の変色なども見られることから、今後は定期的な見直しの機会を持つことでホーム内の雰囲気も変わってくるものと思われる。取組に期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間が狭い為独りになれる場所は居室か玄関近くにあるソファぐらいである。気の合う人同士で話せる場所は有るので一部の方は会話が弾んでいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には家族の写真や入所前から使っていた日用品等を置いて安心して過ごして頂けるよう心掛けている。	入居の際、しおりをもとに準備するもの(クッション、時計、カレンダー、写真、寝具、衣装ケースなど)や状態(重度化など)によっては、居室の移動もある事を伝え、承諾を得ている。衣替えはしおりの中でも家族の支援を記しているが、コロナ禍以降ホームで対応している現状である。居室入り口は個々に応じて表札代わりに顔写真や名前が貼られており、昼食後は居室に戻りひと休みされる方もおられる。	今後家族が居室へ入れるようになった場合は、衣替えや室内の確認など環境整備について家族への働きかけに期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの表示や居室入口に本人様の名前や顔写真を張るなどして場所を覚えやすいようにしている。またホールは狭いながらも導線に出来るだけ障害物がないようにしている。		